Color Science Association of Japan

色名から受けるイメージに関する先天盲と晴眼者との比較

Comparison of the color associations from color names in congenitally blind and sighted people

辛　恩僖　Eunhee Shin　女子美術大学　Joshibi University of Art and Design
名取和幸　Kazuyuki Natori　日本色彩研究所　Japan Color Research Institute

Keywords : congenitally blind, sighted people, color association, rating scale
キイワード：先天盲、晴眼者、色彩連想、評定法

1. はじめに

盲人も、晴眼者のように色を表す言葉から様々なイメージを思い浮かべると思われるが、その特徴はほとんど研究されていない。本研究は、晴眼者と盲人とが色名からどのような印象や事物を連想するのかをアンケート調査とインタビューから明らかにし、両者が持つカラーイメージの相違を検討するものである。

2. 色名から連想される語彙に関する調査

2-1 方法

成人の盲人と晴眼者各5名に、色名の「赤」「黒」「ピンク」からそれぞれ思い浮かべる言葉を1分間以内に口頭で回答させた。これらの色名を採用したのは、赤はBerlin & Kayに始まる基本色彩語進化モデルにおいて初期段階で出現するため、黒は晴眼者にとって照明がなく物が見えない状態も示す、相違を検討するための基本色と考えたため、そしてピンクは基本色彩語の最終段階で登場する派生色だが日常的によく使用されることによる。

2-2 結果

盲人による色名連想語は、晴眼者にとっても理解できるような言葉がほとんどであった。連想語の平均回答数は晴眼者の9.4語に対し盲人は6.1語で、被験者が少ないため明言できないが、連想語数は晴眼者の方が多い傾向がありそうである。色別では、ピンクに対する連想語は両群共に少ないが、赤と黒は連想語が多くこの2語については、盲人よりも晴眼者の方が連想語の数がやや多いようである。また、晴眼者は具体物の名称や概念を示す言葉を答えることが多かったが、盲人では形容詞や動詞の回答率が高い傾向がみられるという違いもあった。

3. 色名に対する言葉の連想度評定調査

3-1 方法

色名の「赤」「黒」「ピンク」から感じられる印象を把握するため、色彩イメージに関するSD法調査でよく用いられている評定尺度の中から片側形容詞を抜き出し、各々の色名から、その形容詞の印象をどの程度感じるかを評価させた。片側形容詞には先行研究結果に基づき、晴眼者のカラーイメージとしてその傾向が強い形容詞を選んだ（例えば「明るい-暗い」の尺度から、「赤」では「明るい」、「黒」では「暗い」）。他に、色ごとに晴眼者から回答されやすい色彩連想語を提示し、その連想されやすさについての評定も行った。調査協力者は盲人32名（先天盲20名、中途失明12名）と晴眼者203名（成人66名、中学生137名）。晴眼者では通常のアンケート用紙を使用し、盲人では回答番号を点字で打った回答用紙に、口頭であげた言葉について当てはまりの程度に応じて ○△×の記号を記入させた。

3-2 結果と考察

色名に対する形容語や連想事物ごとの当てはまり評定値から、先天盲と晴眼者とを比較すると、全般的には両者の傾向にはそれほど大きな違いはみられなかった。形容語への評定では、2群による平均評価値の相関係数は赤、黒、ピンクの順に0.850、0.769、0.829であり、名詞の連想程度でも0.812、0.783、0.832であった。

NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan

評定段階ごとの回答率をみると、両群の色彩連想には以下のような相違が確認された。

「赤」に対し、先天盲は、晴眼者が赤の特徴的な印象として評価する「明るい」「暖かい」「陽気な」など活動性に関わる言葉や「止まれ」などの語を、より当てはまると回答した。逆に「赤」から「辛い」は先天盲からは思いつきにくいようだ(思いつかないが先天盲40%、晴眼者は8%)。晴眼者は色感覚と味覚の同時体験により「赤」と「辛い」が結びつくのに対し、先天盲では味覚と色とは「赤い唐辛子」というような知識を介してつなげられるため、「辛い」と「赤」との連想は弱くなるのではないだろうか。

「黒」において、晴眼者からは連想されやすく、先天盲ではそうでもない言葉は「不安」「悪い」などである。黒から「暗闇」が連想されるのは先天盲と晴眼者に共通だが、暗闇が視覚を奪うネガティブな感情を生むかには違いがあると思われる。他に、先天盲が「黒」により 強く感じるのは、「硬い」「大人っぽい」などの印象である。

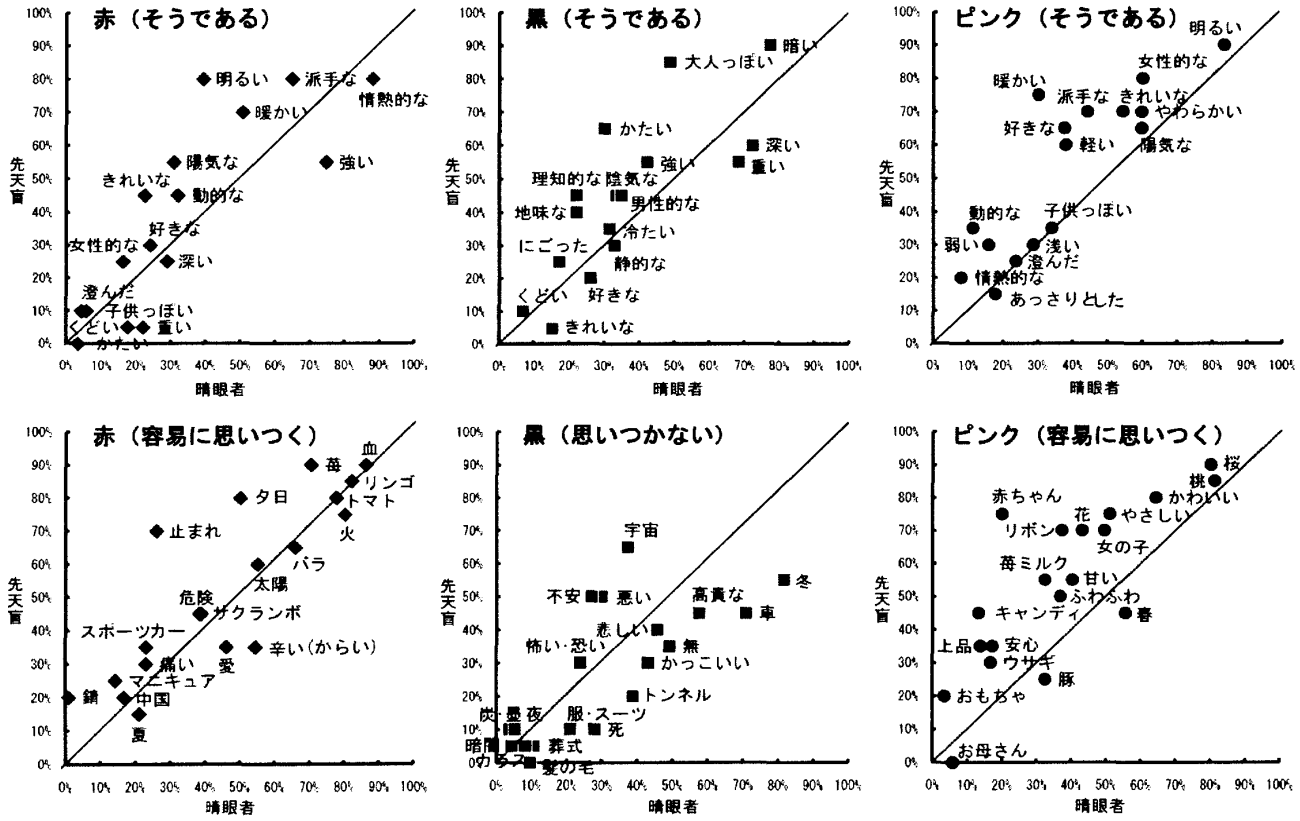
「ピンク」から先天盲がより強く感じるのは「暖かい」「派手」「好き」などの印象と、「赤ちゃん」という言葉であった。また「ピンク」は「あっさりした」色ではないと先天盲の65%が回答していたことは興味深い。

4. フリーインタビュー調査

盲人数名に、色に関わる様々な話を聴いた。色へのこだわり度は人により異なり、色に関する情報は学校等で学ぶよりも日常生活の中で得る方が多い、色が分からず不便なこともある、食べ物の色は連想しにくく、ある食べ物はある色と言われるとそうかなと思うが、色名から食べ物を連想するのは難しいそうである。「赤」からの連想の際、晴眼者は食べ物の名前から答え始める人が多く、盲人では名詞が少なく食べ物の回答が少なかったのはそのためかもしれない。

5. まとめ

色名イメージの傾向は、盲人と晴眼者とでそれほど大きな違いはみられなかったが、先天盲が感じる色名イメージはその色の心理的特徴が強められているようである。 また、先天盲においては色と味覚などの共感覚的イメージは弱く、黒（暗闇）のネガティブな印象もやや弱くなるなど、いくつかの相違が確認された。



NII-Electronic Library Service